

未来に必要な「非認知能力」を育むため、 幼・保・小・中で一貫した振り返りの環境を構築

大阪府 茨木市教育委員会

茨木市教育委員会では、2008年度から継続してきた学力・体力向上施策の成果と課題を踏まえ、2020年度に「茨木っ子プラン ネクスト5.0」を策定し、5か年計画で取り組んでいる。その中核となるのが、他者と協働して取り組む力、困難にくじけず乗り越える力といった、テストで測りにくい力、いわゆる非認知能力の育成だ。

ポイント

大阪府の北部に位置する。施行時特例市であり、大阪市や京都市へアクセスしやすいベッドタウンとして、人口が増加傾向にある。日本人で初めてノーベル文学賞を受賞した作家・川端康成は、旧制中学校卒業まで現在の茨木市で学んだ。「一人も見捨てへん教育」のビジョンの下、学力低位層を減らすことを目標に掲げた2008年度からの取り組み^{*1}などで全国に知られる。

人口 約28万6,000人

面積 76.49km²

市立学校数 小学校32校、中学校14校

児童生徒数 小学生約15,500人、中学生約7,600人

教職員数 約1,600人

茨木っ子プラン ネクスト5.0

目的 2008年度に始めた「学力向上プラン」以降の取り組みの成果と課題を整理し、「これからの社会を生きる力を育む」「ともに学び、ともに育つ教育を進める」「確かな言語力を育む」などの最重点項目を設定。特に、これからの社会を生きる力として、非認知能力の育成も推進することとした。

内容 市として育成を目指す非認知能力「茨木っ子力」を策定。ルーブリックとともに市内の幼稚園、保育所、小・中学校に周知した。また、非認知能力の育成にあたって重要となる振り返りのツールとして、「茨木っ子キャリアパスポート」と「茨木っ子いま未来手帳」^{*2}を導入し、全校で活用することとした。

実施年度 2020年度から施行

対象 保育所、幼稚園、小学校、中学校

教育長

岡田祐一

おかだ ゆういち

茨木市教育委員会指導主事、茨木市立中学校校長等を経て、2016年5月から現職。



学校教育部

学校教育推進課 参事

大池輝暢

おおいけ てるのぶ

公立小学校教諭、教育委員会指導主事を経て、2022年から現職。



に学ぶ力)」の4つの力を、思考力・判断力・表現力と教科の学力を支える、言わば根にあたる非認知能力を「茨木っ子力」と位置づけ、その育成に一層力を入れることとした。

「茨木っ子力」の策定にあたっては、幼稚園・保育所・小学校・中学校の教職員と市教委が協議を重ねた。そして、子どもが成長し、自己実現を果たしていく過程で直面する課題や困難を乗り越えていくための12の「目指す姿」(図2右)を描き、それぞれを見取るルーブリックを策定。教職員や保護者、地域の人々が、子どもを見取る際の目安として活用できるようにした。

事業概要

育てたい子どもの姿を 学校種を超えて議論

茨木市教育委員会(以下、市教委)は、これからの社会を生きる子どもたちに必要な力として、「新しい価値を創造する力」「多様な他者とつながり、協働する力」といった、テストでは測りにくい力、いわゆる非認知能力を「茨木っ子力」として策定。そうした力を育むための教育を幼稚園、保育所、小・中学校、家庭、地域で

連携して展開している。

市教委が非認知能力の育成を掲げたのは、5か年計画として2020年度から推進する「茨木っ子プラン ネクスト5.0」においてだ。同プランでは、子どもに必要な力を「学力の樹」として整理(図1)。そこでは、それまでも同市が子どもに育みたい力として育成してきた、「ゆめ力(未来に向かって、努力できる力)」「自分力(自分と向き合い、高める力)」「つながり力(他者を思いやり、つながる力)」「学び力(興味・関心を広げ、意欲的

*1 『VIEW21』教育委員会版 2016年 Vol.3 で茨木市の学力向上に関する施策を紹介している。https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-board/article04183/

*2 元岡山大学准教授の中山芳一氏の監修を受けて、ベネッセコーポレーションが提供する「今未来手帳」を基に茨木市バージョンを作成。

非認知能力の育成の鍵として、
振り返りを重視

子どもに非認知能力を育成する際には、「体験→経験→振り返り→学び」の活動が重要であると、岡田祐一教育長は説明する。

「非認知能力の育成にあたっては、子ども自身が、茨木っ子力をどの場面で求められたか、その時にどのように発揮できたかを内省し、『自分はこの力をもっと伸ばしたい』と意識できるようにすることが大切です。そこで本市では、子どもの振り返り

を促進する事業として『茨木っ子キャリアパスポート』と『茨木っ子いま未来手帳』を導入しました」

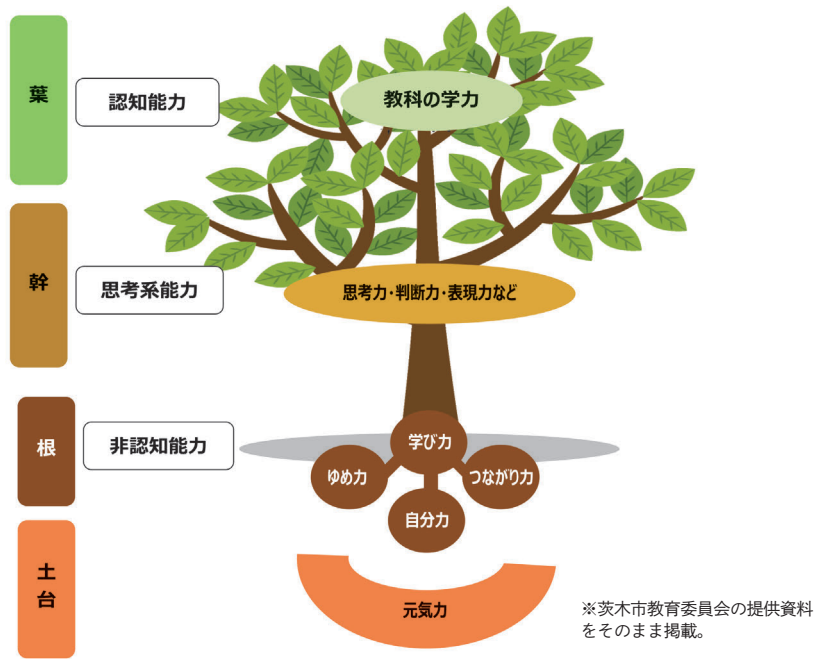
茨木っ子キャリアパスポートは、4歳児から中学3年生までが活用。11年間にわたって、自分が体験したことを非認知能力の観点から絵や文字で振り返り（P.19図3）、専用のファイルにとじていく。非認知能力の育成の観点で茨木っ子キャリアパスポートは、異なる学校種の教員が子どもの成長を連続的に見守るための資料としての役割も担っている。

茨木っ子キャリアパスポートが主

に学校行事などの特別活動の振り返りのツールであるのに対して、日々の継続的な振り返りのツールとして機能しているのが、茨木っ子いま未来手帳だ。同手帳は中学生に配布し、日・週・月単位の目標や出来事の記録と、自身のスケジュール管理に活用している。状況に応じた自己管理能力を育むことがねらいだという。

「手帳を通じた振り返りによって、1日1日をやりっ放しにせず、次の見通しを持てるようになるため、非認知能力の土台となる、『メタ認知能力』が高まっていきます。また、自己管理能力を育むことで、生活の質を高めていくことにもつながります」（岡田教育長）

図1 茨木市「学力の樹」



※茨木市教育委員会の提供資料をそのまま掲載。

図2 「茨木っ子力」の4つの力と目指す12の姿

名称	定義	目指す姿
ゆめ力	未来に向かって、努力できる力	夢や目標を持つことができる（目標設定）
		夢や目標に向けて挑戦することができる（チャレンジ）
		あきらめず最後まで取り組むことができる（継続・レジリエンス）
自分力	自分と向き合い、高める力	自分のことを肯定的にとらえることができる（自尊心・自己有用感）
		自分の感情をコントロールすることができる（自己抑制）
		自分の考えや判断に自信を持つことができる（自信）
つながり力	他者を思いやり、つなげる力	他者と協力して取り組むことができる（協力）
		他者の意見や考えを受け入れることができる（リスペクト）
		自分の考えや気持ちを他者に伝えることができる（コミュニケーション）
学び力	興味関心を広げ、意欲的に学ぶ力	様々なことに興味関心を持つことができる（興味関心）
		疑問や不思議に感じたことを解決するために行動することができる（課題解決）
		学びや経験を新しい考えや行動につなげることができる（振り返り力）

※茨木市教育委員会の提供資料をそのまま掲載。

事業実施までの経緯

市教委モデルの運用から
各学校主体の柔軟な運用へ変化

市教委では、2008年度から3年ごとに学力向上計画を策定し、成果の検証とその結果に基づく新たなプランを立案してきた。文部科学省「全国学力・学習状況調査」の結果も、小・中学校ともに着実に改善する中で、市教委が次の施策の鍵として改めて注目したのが、同調査で正答率が40%未満の児童生徒だった。学校教育部学校教育推進課の大池輝暢参事は、次のように説明する。

「正答率40%未満の児童生徒の状況を分析すると、学校生活、友人関係、生活環境などに課題を抱えているケースが少なくないことが分かってきました。そうした子どもに対しては、教科学力を高めることにフォーカスするだけでなく、その根っこにあたる非認知能力を育むことが重要だという考えに改めて至りました」

非認知能力を土台に、教科学力を含むこれからの社会を生きる力を育

学校事例

非認知能力「しのっ子力」の視点で 子どもを見取り、自己肯定感を育む

大阪府 茨木市立東雲中学校

育成を目指す非認知能力を 生徒作成のイラストで校内に周知

茨木市立東雲中学校では、「茨木っ子力」の4つの力と目指す12の姿を基に、同校の生徒会の生徒と教員が自校で身につけたい力を議論。「しのっ子力」として新たに9つの力を設定した。しのっ子力は生徒が描いたイラスト（図4左）とともに校内に浸透し、教育活動の振り返りに活用されている。

「体育祭では、『協調性を意識して他学年と協働しよう』などと、学校行事や時期に応じて意識させたい非認知能力を設定し、生徒に伝えています。また、各教科でも生徒に意識させたい非認知能力を定めています」（田村博樹先生）

また同校では、毎日の職員朝礼で、その日に学校全体として意識したい非認知能力を田村先生がその理由とともに説明している。

「育成を目指すしのっ子力を教員全員で共有して1日を始めるようにしたことで、生徒を軸にした組織づくりが進んでいるように思います」（平山望美教頭）

生徒も毎朝、茨木っ子いま未来手帳を活用して、前日の振り返りを行うとともに（図4右）、今日1日で意識したいしのっ子力を選んで、該当する色のシールを手帳に貼っている。同校の教員は中学校区内の小学校に出向き、中学校進学前の6年生にも手帳を使った振り返りを体験

してもらい、中学校生活へのスムーズな移行につなげているという。

日々の振り返りで教員、生徒に 浸透した非認知能力の重要性

同校では学校行事の後に、生徒会の生徒が自主的に「どんな力が伸びたか」を調べ、その結果を校内で報告するなど、非認知能力の視点での振り返りも定着している。

「教員間でも、しのっ子力の視点で、『あの子、最近成長したね』などと生徒を褒める言葉が出やすくなっていますし、その影響なのか、生徒もいろいろなことに前向きです。今の日本は、子どもの自己肯定感の向上が課題ですから、生徒には自分の活動を振り返ることで、もっと自信を持ってほしいと思っています」（山田泰司校長）

非認知能力の視点で自分の経験にどんな意味や価値があったかを確認できるようになった生徒は、他



校長
山田泰司
やまだ・ひろし
同校に赴任して1年目。



教頭
平山望美
ひらやま・のぞみ
同校に赴任して2年目。



確かな学びをはぐくむ
学校づくり推進担当
田村博樹
たむら・ひろき
同校に赴任して5年目。

者の過去の苦労や挫折も価値あるものと捉え、そうした経験を語るクラスメートの言葉にも真剣に耳を傾けるようになっていっていると、田村先生は感じている。茨木市が目指す「一人も見捨てへん教育」は、同校の生徒の中に確かに息づいている。

図4 育成を目指す非認知能力「しのっ子力」と「茨木っ子いま未来手帳」での振り返り



※東雲中学校の提供資料をそのまま掲載。